

令和 6 年度 島根大学入学式 式辞

本日、島根大学に入学された新入生の皆様、そしてご家族や関係者の皆様、ご入学誠におめでとうございます。この良き日に、ご来賓として島根県知事丸山達也様、ならびに各学部後援会・同窓会会長等の皆様のご臨席を賜り、新入生の皆さんをお迎えできることは島根大学の大きな喜びであり、大学を代表して心からお祝い申し上げます。

島根大学は、医学部を含む理系、文系の 7 学部、4 研究科のバランスの取れた構成に 6000 名あまりの学生が学ぶ、中規模の国立総合大学です。新入生の皆さんは、入学の喜び、希望とともに、大学で学ぶこと、また多くの方は故郷を離れてこの島根の地で学び、生活することに、期待と不安の入り混じった気持ちでおられることと思います。大学での学び、島根の地で大学生生活を過ごすことの意義について、私なりの考えをお話します。

私は、大学は、学生はもちろん教職員も、すべての構成員が真理を追究して、一人一人が真摯に学び、成長するところであり、一人一人の成長を大切にすべき、と考えています。また、最先端の科学といっても、百年前もその時点が最先端と考えていたのは今と全く同じであり、むしろ知れば知るほど解明すべきことは増えていることを考えると、我々が本当に知るべきことは無限にあり、今知っていることはそのほんの一部にすぎないと考えています。

一方で、皆さんは、VUCA という言葉をご存じでしょうか？ Volatility (変動性)、Uncertainty (不確実性)、Complexity (複雑性)、Ambiguity (曖昧性) の 4 つの単語の頭文字をとった造語で、新型コロナウイルスの蔓延、自然災害の増加、A I (人工知能) などのテクノロジーの急速な発達、さらにロシアによるウクライナ侵攻などによる世界情勢の変化など、予測の難しい世界の現在および今後の状況を表しています。また人新世 (Anthropocene) という言葉を聞かれた方も多いのではないのでしょうか。これは、人類の経済活動や核実験が、地球の歴史上、小惑星の衝突などに匹敵するような地質学的な変化を地球に刻み込んでいることを表わす言葉です。

人類が営々と積み上げてきた文明は、できたものを土台にした改良を繰り返しますから、当然加速度的に発展します。一方、人類を含む生物が暮らすことのできる地球環境には物理的な限界があります。VUCA の時代や人新世といった言葉は、文明の加速度とその成果が、いよいよ生命の場としての地球の限界を越えつつある、持続可能性が脅かされていることを表しています。これらの地球的課題を、世界で連携して解決しようとする試みが、2030 年までの SDGs 持続可能な開発目標や、さらにその後のカーボンニュートラルなどの取組です。本学でも SDGs 行動指針を掲げて、多くの取組を進めて HP で紹介しています。

しかし、VUCA の時代という言葉自体が示すように、その解決策を、現時点で政治家も科学者も誰も知りません。では、誰がどこでその解決策を考えるのでしょうか？私は、大学、中でも日本の国立大学、中でも島根大学のようなバランスの取れた構成を持つ地方の国立大学こそが、それに先導的に取り組むべきであると考えます。日本は、少子高齢化、人口減少の世界最先端を走り、しかし豊かな歴史と文化により世界から一定の敬意を今も得ており、本当に持続可能な社会を創るために日本、特に課題先進地である島根のような地方は世界を先導すべき位置にあります。また都会の喧騒、情報の超過多から離れて、地方の中でも、指折りの豊かな歴史と文化、自然に恵まれた島根の地においてこそ、これからの時代を担う学生の皆さんが世界的な課題を自分事として主体的にとらえ、教職員と一緒に真剣に考え、議論し、ともに学び、解決策を探っていくべきと考えています。

この地には、古代出雲、松江城・茶の湯、和菓子をはじめ日本古来の伝統が今に息づいています。そして夕陽 100 選の宍道湖はじめ豊かな自然、新鮮で美味しい食べ物に恵まれています。そのような文化的で健康的な環境のもと、豊かな学びへ向けた島根大学の取組をご紹介します。

まず、最先端の研究、学びとして、「もののけ姫」のモデルとなった奥出雲のたたら製鉄から今につながるモノづくりの伝統を受けて、次世代たたら協創センターという研究所を、オックスフォード大学の Reed 教授を所長に迎えて設立し、世界最先端の金属研究を推進しています。さらにその人材育成面の発展として昨年 4 月、世界的なエネルギーの課題に対して金属はじめ材料、素材の視点から理解し解決しようとする、材料エネルギー学部を新たに設置しました。その教育の柱として、知識や技術をいかに社会に応用するかを考え続ける能力を身に着ける、日本初の米国流のアントレプレナーシップ教育に、今学生と教員が一緒になって取り組んでいます。これらは、服部泰直前学長が強いリーダーシップにより推進されてきた取組であり、これからもしっかりと継承発展させていきます。

また、宍道湖・中海など汽水域の世界的な研究を行っているエスチュアリー研究センター、高齢化先進県島根の健康長寿へ向けた先端的研究を行っている地域包括ケア教育研究センターはじめ、農林水産の一次産業や医学・ヘルスケアなどの自然科学のみならず、人文社会科学でも、古代出雲の研究や、世界でも先導的な地域課題に根付いたユニークな研究が展開されており、これらが教育にも存分に活かされています。また、これらすべての基礎となり、今後の AI などの進展に対応できる力をつけるため必須となる数理・データサイエンス教育についても、全学的な教育体制を整え、強化を続けています。

さらに、「クロス教育」という、これらの自然科学、人文社会科学の学びを、学部、学科を飛び越えて学生自らが主体的にプログラムして、文理融合した「総合知」を学ぶ仕組みを新たに作りました。本学独自の「へるん入試」で「学びのタネ」を抱いて入学された方々はじ

め、多くの皆さんが、このクロス教育を積極的に活用して、世界課題の解決へ向けた「ここにしかない学び」を主体的に創造されることを期待しています。

そして、皆さんが将来世界の持続可能性に貢献する活動ができるようになるためには、世界とつながることが今後一層重要になります。現在アジア諸国を中心に 240 名余りの留学生が、それぞれの母国の SDG s 課題を解決するため、高い志を持って島根大学で学んでいます。国を越えた交流により、世界の現状を知ること、若い世代同士で危機感を共有し、連帯の必要性を実感することが、世界課題解決への第一歩となります。島根大学では、松江キャンパスに学部ごとに「グローバルコモンズ」、出雲キャンパスに「e-clinic」という、留学生と日本人学生、教職員が日常的に交流できるスペースを設けて、国を越えた交流を促しています。さらに 5,6 月に「留学 week」、11,12 月に「グローバル月間」を設けて、国際交流と海外への留学を強力に勧めています。

一方で、世界とつながる土台として、豊かな文化の残る島根の地域の皆さんとの交流もとても重要です。地域の現場に根差した学び、何のために学ぶか、学んだものをどう活かすか、課題とともに日本文化、伝統について、留学生も含めて、地域の現場で学ぶ機会を今後さらに増やしていきます。

これらの学内外での国際交流、地域との交流は、皆さんが将来どの分野に進むとしても、とても大きな力になることは間違いありません。ぜひ積極的に取り組んでください。

最後に、島根大学で学ぶ間に是非親しんでいただきたい著名な文化人を 2 人ご紹介します。ひとり、「へるん入試」の名にもなっているラフカディオ・ハーン、小泉八雲です。雪女などで有名な「怪談」の他、松江にはわずか 1 年 3 か月の短い滞在だったにもかかわらず松江、出雲の古き良き日本への深い理解と愛情にあふれた「知られぬ日本の面影」などの多くの著作があり、松江城の北の堀端には記念館があります。島根大学では、ハーンについて皆さんが学べるユニークな学習が工夫されています。また、ハーンには津波、震災についての著作もあり、丁度今松江キャンパスの図書館で、東日本大震災と小泉八雲を関連付けた企画展示を開催しています。これらをぜひ訪れて、ハーンを通じてこの地の良さ、防災への取組の大切さなどを学んでください。

ハーンの日本への温かい理解の根底には、インド哲学と仏教への深い造詣があったことが研究されていますが、ご紹介したいもう一人の中村元さんは、インド哲学、仏教、東洋思想の研究から世界の比較思想論に生涯をかけて取り組んだ偉大な学者です。松江市の名誉市民で、中海に浮かぶ大根島に記念館があります。私は、大学生の時に西洋の哲学、心理学の本を読んで自分の感性との違いを感じていた時、中村先生の「東洋人の思惟方法」という、原典に徹底的に基づいた膨大な作業により、インド人、中国人、日本人の特性を明らかにした大変な労作を読んで、深く感銘を受けました。このように一生涯、学問を追究され続けた中村先生の根底にあったのは「慈しみの心」、生きとし生けるものへの深い愛情と世界平和

への強い願いであり、これこそが世界課題の解決の一番の基盤となるものと思います。著作や記念館を通じて中村元さんにも、ぜひ触れてほしいと願っています。

皆さんの島根大学でのこれからの学びが、皆さんの将来の社会における活躍と貢献、さらに世界の持続的な平和と発展につながりますよう、心から祈念して式辞とします。

令和6年4月2日
国立大学法人 島根大学
学長 大谷 浩